

曠野

小川未明

青空文庫

野原のほらの中なかに一本ほんの松まつの木きが立たっていました。そのほかには目めにとまるような木きはなかつたのです。

「どうして、こんなところに、ひとりぼっちでいるようになったのか。」

木きは自分じぶんの運命うんめいを考かんえましたけれど、わかりませんでした。そして、そんなことを考かんえることの、畢ひつき竟きやうむだだということを知しったのです。

「ただ、自分じぶんは大きおおくなって、強つよく生きいなければならぬ。」と
思おもいました。

見み上げると、頭あたまの上うへをおもしろそうに、白しら雲くもがゆるゆるとし

て流れてゆきました。

また、あるときは美しい小鳥たちが、おもしろそうに話をしながら飛んでゆきました。しかし、雲も小鳥たちも、下に立っている木を見つけませんでした。

「小さくて、わからないのだな。」

木は、ため息をついて叫んだほど、その存在を認められなかつたのです。

早く大きくなろうと木は思いました。認められたいばかりでなしに、地平線の遠方を見たかったからです。一年はたち、また一年はたつというふうに過ぎてゆきました。そして、この松の木が、すこしばかり根もとの地の上に、自分の小枝の影が造られ

るほどになったとき、その存在そんざいを認めみとてくれたのは、空そらをゆくくも雲くもでもなければまた小鳥ことりたちでもありませんでした。それは、意い地じ悪い風かぜだったのです。伸のびればますます強つよく荒あく風かぜはあたりましたした。

かえりみると、この木きが、野原のほらで大きおおくなつた歴史れきしは、またつた風かぜとの戦たたかいであつたといえるであります。木きはけつしてこのことを忘わすれません。ある年とし、台風たいふうの襲おそつたとき、危あやうく根ねこぎになろうとしたのを、あくまで大地だいちにしがみついたため、片かたえ枝だを折おられてしまいました。そして、醜みにくい形かたちとなつたが、より強つよく生いきるといふ決けつ心しんは、それ以来いらい起おこつたのであります。いまは、もはや、どんなに大きおおな風かぜが吹ふいても倒たおれはしないという

自信じしんがもてるようになりました。

「野原のほらの一本松ほんまつ。」

空そらをゆく雲くもや、頭あたまの上うえを飛とぶ小鳥ことりたちが、それを認みめたばかりでない。ここを通とおる百姓しやうもそういつて呼よべば、村むらの子供こどもたちもみんな知しっていたのであります。

木きは、こうして大おおきくなりました。しかし頭あたまをあげて、地ち平へい線せんを望のぞみただけれど、あちらに山やまの頂ただきと、黒くろい森もりと、ぽつりぽつり人家じんかを見みるだけで、けつして、そのはてを見みることはできませんでした。また、青あおい空そらは、ますます高たかく、白しろい雲くもは、はるかに上うえを飛とんでいるのであつて、けつして、自じ分ぶんの頭あたまのうえをすぎる

ときに、歩みをとめて、話しかけてくれるようなことはなかったのです。

ただ、小鳥だけが、まれにきて枝にとまって翼を休めました。なかでも渡り鳥は、旅の鳥でいろいろの話を知っていました。街の話もしてくれれば、港の話もしてくれました。もつときけばなんでも教えてくれるのであったが、松の木は、自らは経験のないことで、ただ渡り鳥のする話をきいて、世の中の広いということを悟るだけです。

「なぜ、私は、あなたのような鳥に生まれてこなかったんです。う。」と、松の木がいますと、

「そんなことをうらやんではなりません。あなたは、これから百

年、二百年と生きられるからです。もっと、いろいろのを見たり、聞いたりなさるでしょう。私たちは、明日もわからぬ命です。なにが幸福か、不幸かということは、神さまだけにしかわかるものでありません。」と、渡り鳥はいいました。

「もし、またこの近傍をお通りのときは、ぜひここへきて休んでください。そして、おもしろい話をきかしてください。」

「きつと、まいりますよ。」

そういつて、渡り鳥は去ったのでした。こういうようなことが、これまでに何度あったでしょう。二度と同じ渡り鳥で、たずねてくれたものはなかったのです。

「あの赤い小鳥は、どうしてももうそつきとは思えなかったが、身

の上うへに変わかりがあつたのでなからうか。」と、松まつの木きは、考かんえ
るのでありました。

八月がつの赫かく灼しゃくたる太陽たいようの下もとで、松まつの木きは、この曠野こうやの王おうじ
者やのごとく、ひとりそびえていました。

ある日ひのこと、一人ひとりの旅人たびびとが、野中のなかの細道ほそみちを歩あるいてきまし
た。その日ひは、ことのほか暑い日ひでした。旅人たびびとは野のに立たつてい
る松まつの木きを見みますと、思おもわず立たち止どまりました。

「なんだか、見覚みおぼえのあるような松まつの木きだな。」

彼かれは、子こ供どもの時分じぶん、村むらはずれの原はらつぱに立たつていた、そして、
その下したでよく遊あそんだ松まつの木きを思おもい出だしたのでした。

「よく似た木もあつたものだ。やはり、片方の技が折れていたが。」

村の松の木の片方の枝は、冬、大雪が降つたときに折れたものでした。旅人は、なつかしように、ひじょうにそれとよく姿の似ている、松の木の下にきて休みました。木の影は、こうして慕い寄つた旅人をいこわせるには十分でありました。目の前には、いろいろの雑草の花が、はげしい日光を浴びながら咲いて、ちようや、はちが飛び集まつているのながめられましたけれど、ここだけは、まったく日が陰つて、広い野を越えて吹いてくる風は、汗の引き込むほど涼しかつたのでした。

「そうだ。遠くへ遊びにいつても、帰りに、あの木の頭が見える

と安心あんしんしたものだ。」

旅人たびびとは、子供こどもの時分じぶん、釣りつりにいつて、疲つかれた足あしを引ひきずりながら帰かえったとき、また学がっこう校がっこうの帰かえりにけんかをして、先せん方ほうはおおぜいだったとき、そんなときでさえ、あちらに、親したしい松まつの木きが見みえると、もう家うちに着ついたような気きがして、急きゆうに勇ゆう気きが百ばい倍ばいしたことなどを思おもい出だしたのでした。そして、しばらく彼かれは、遠とおい昔むかしの空くう想そうにふけていました。あまり涼すずしいので、いい気き持もちになつて、そのまま木きの根ねをまくらにして横よこになつたのであります。

海うみのように、青あおい、青あおい空そらを、旅人たびびとはぼんやりと仰あおむ向けにな

つてながめていました。小さな白い雲、ややそれよりも大きい雲、ほんとうに大きな白い雲、いくつかの雲が鬼ごっこでもしているように、追いつ、追われつしていました。

旅人は、このとき、忘れていた幼友だちの名まえと、顔つきをはつきりと思ひ出したのでした。そればかりでなく、自分もその仲間にはいつて、いつしよに走りつこをしている姿を目に見たのであります。

「みんな、あの時分の友だちはどうしたろうな。」
 そのうちに、いつしかいびきをかいて、ぐうぐうと眠つてしまいました。

松の木は、旅人のひとりごとをきいて、自分とよく似た木が、

この地上ちじょうのどこかに存在そんざいしていることを知しつたのです。それは、たがいに相見あいみることはなくとも、兄きょうだい弟だいでなければならぬ。松まつの木きは、はじめて不思議ふしぎな力ちからを感じかんじました。もう、これからおれは、独りひとぼっちと歎なげくまいと思おもいました。

「力ちから強つよく風かぜに向むかって戦たたかおう。そして、慕したい寄よるものを慰なぐさめよう。」

これは曠野こうやの王者おうじやとして、まさとうとかんがに貴とうとかんがい考ええでありました。

このときです。つばめは、しきりに鳴なきました。あらしのくるのを知しらしたのでした。

日ひの光ひかりはかげって、雑草ざっそうの花はなの上うへは暗くらくなりました。ちよう

や、はちは、はやくも、どこかへ姿すがたを隠かくしてしまいました。

はげしく呼ぶ松風の声で、旅人は、目をさまして驚きま
した。

「ああお蔭で、気持ちよく眠った。こんどここを通るときまで無
事でいてくれよ。」と、彼は、松の木をなでたのであります。

疲れを回復した旅人は、新しい元気に勇んで、街をさして
急ぎました。

あとから、雷の音が追いかけるようにきこえたのです。ふり向
くと、もはや野原のあなたは、うず巻く黒雲のうちに包まれて
いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「民政」

1933（昭和8）年8月

※表題は底本では、「曠野《こごや》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

曠野

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>